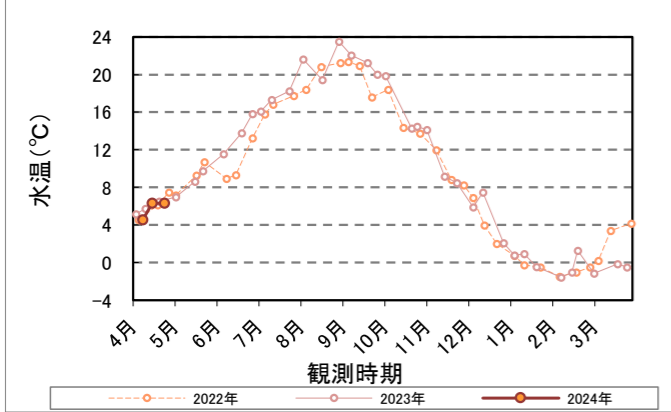


◎オホーツクタワーの動物プランクトン分析速報 (2024年4月)

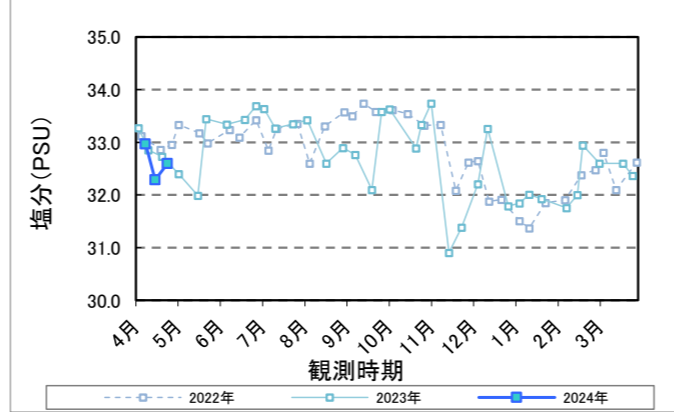
※海洋観測：紋別市
※動物プランクトン分析：(株)エコニクス

海洋環境データ

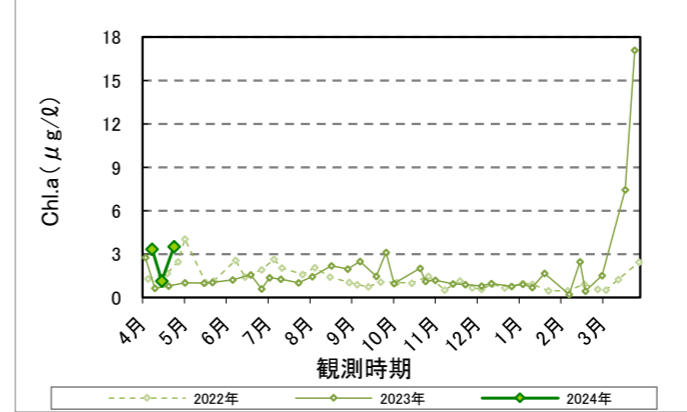
◎水温 (0~9mまでの平均値)



◎塩分 (0~9mまでの平均値)



◎Chl. a (0~9mまでの平均値)



出現量の多かった種類



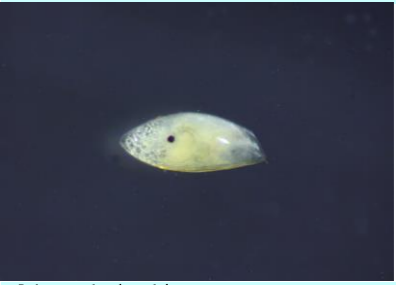
・Pseudocalanus newmani
(カイアシ類：シュウド・カラス・ニューマニ)
体長：♀0.9-1.5mm、♂0.8-1.2mm。冷水域に極めて普通に出現する。東北以北の沿岸では冬季最優占カイアシ類の1種となる。



・Oithona atlantica
(カイアシ類：オイナ・アトランティカ)
体長：♀1.1-1.4mm、♂0.8mm。太平洋、インド洋、大西洋の寒帯・亜寒帯に分布する。日本では冷水域の沿岸・外洋で普通に出現する。



・Rathkea octopunctata
(クラゲ類：シミコウラゲ)
傘径：4.5mm以下。日本各地の沿岸にみられる。未成熟な時期に、傘の中に複数のクラゲ芽ができ、それが1つずつ分離してクラゲとなるため、急速に個体数を増やすことができる。



・Balanomorpha (cypris)
(フジツボ類のキブリス幼生)
フジツボ類の発生途中の幼生。フジツボ類はほとんどが雌雄同体で、卵のふ化後にノープリウス幼生、キブリス幼生の段階を経て固着生活に移る。写真はキブリス幼生。



・Balanomorpha (nauplius)
(フジツボ類のノープリウス幼生)
フジツボ類の発生途中の幼生。フジツボ類はほとんどが雌雄同体で、卵のふ化後にノープリウス幼生、キブリス幼生の段階を経て固着生活に移る。写真はノープリウス幼生。

概要

Table with 3 columns for dates 4月8日, 4月15日, and 4月24日. Rows include average temperature, salinity, Chl. a, sedimentation, and species lists for NORPAC and standard nets.

※海洋環境データ欄の水温、塩分、Chl. aのグラフは、水深0~9mまでの平均値をプロットしたものである。平均水温、平均塩分、平均Chl. a欄の数値は、表示の都合上、水深0~9mまでの平均値を小数第2位で四捨五入した値で示し、グラフ上の表示と異なる場合がある。

※種名 "Thy. inermis" は "Thysanoessa inermis" の略称である。
※種名の先頭に "◎" がつく種類は、出現量の多い種類を示す。[ ]内の "+" はサンプル中の個体数の多さが後述の程度であると判断し、区分したグループである ([+]出現、[+]やや多い、[+]多い、[+]かなり多い、[+]極めて多い)。
※種名の後ろの記号は、分析者の経験から北海道における出現傾向に後述の特徴があると判断し、区分したグループである (◆冷水性種、●暖水性種、■汽水性種)。

※参考文献：
①千原・村野 (1997) 日本産海洋プランクトン検索図説[東海大学出版会]
②山路 (1966) 日本海洋プランクトン図鑑[保育社]
③岩国市立微生物館 監修 (2011) 日本の海産プランクトン図鑑[共立出版]
④Wilson, M. S. (1966) North American Harpacticoid copepods. 8: The Danielssenia sibirica group, with description of D. stefanssoni Willey from Alaska. Pac. Sci. 20 (4), 435-444.
⑤Pinchuk, A. I. & Hopcroft, R. R. (2006) Egg production and early development of Thysanoessa inermis and Euphausia pacifica (Crustacea: Euphausiacea) in the northern Gulf of Alaska. J. Exp. Mar. Biol. Ecol. 332, 206-215.
⑥林 (2006) 水産無脊椎動物学入門[恒星社厚生館]
⑦Ohtsuka, S., Itoh, H. & Mizushima, T. (2005) A new species of the calanoid copepod genus Centropages (Crustacea) collected from Shimizu Port, middle Japan: Introduced or not? Plankton Biol. Ecol. 52 (2), 92-99.
⑧西・加藤 (2002) 日本産カムリゴカイ科多毛類の分類について。タクサ. 13, 5-17.
⑨今島 (1996) 環形動物 多毛類[生物研究社]
⑩日本プランクトン学会 監修 (2011) ずかん プランクトン[技術評論社]
⑪水島・鳥澤 監修 (2003) 漁業生物図鑑 新北のさかなたち[北海道新聞社]
⑫古賀 (1960) Centropages abdominalis SATOのノープリウス幼生。日本水産学会誌. 26 (9), 877-881.
⑬伊藤・水島・久保田 (2005) 駿河湾三保沖におけるカラヌス目カイアシ類の季節的消長。東海大学紀要海洋学部. 3 (1), 19-35.
⑭大越・野村 (1990) 穿孔性多毛類Polydora属による北海道地方、東北地方沿岸のホタテ貝浸食状況。日本水産学会誌. 56 (10), 1593-1598.
⑮榎水・久保田・平野・リンズィー (2015) 日本クラゲ大図鑑[平凡社]
⑯奥谷 (2017) 日本近海産貝類図鑑【第二版】[東海大学出版部]
⑰大塚・上田・岩淵・伊東・徐・坂口・平野・木村・上野 (2007) 移入種か、在来種か? : 清水港から記載された浮遊性カイアシ類の1種の導入の可能性を検証する。日本プランクトン学会報. 54 (1), 30-38.
⑱西村 (1992) 原色検索日本海岸動物図鑑【1】[保育社]